

玉類からみた古墳時代開始過程の研究 : 弥生時代後期から古墳時代前期の西日本を中心に

谷澤, 亜里

<https://hdl.handle.net/2324/1931990>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (比較社会文化), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 谷澤 亜里

論 文 名 : 玉類からみた古墳時代開始過程の研究
— 弥生時代後期から古墳時代前期の西日本を中心に —

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、勾玉、管玉、小玉などの玉類の流通・消費の様態の分析を通じて古墳時代の開始前後における地域間・集団間関係を通時的に復元することで、古墳時代の開始過程を考察することを目的とする。

第Ⅰ章では、研究史の整理と検討を行い、以下の課題を設定した。

- (1) 各器種の流通様態に、いつ、どのような画期がみられるかを明確にする。
- (2) 玉類が装飾品として流通しているのか、パーツの状態で流通しているのかを解明する。
- (3) 地域社会における玉類の具体的な入手形態、分布形成メカニズムを明らかにする。

第Ⅱ章では、第Ⅰ章で析出した課題(1)～(3)を解決するための資料と方法を議論した。

第Ⅲ章では、課題(1)の解決のため、各器種の流通様態を通時的に検討し、以下の結果を得た。まず、弥生時代後期後半～終末期に、舶載ガラス玉類の流入量が激減し、既存の流通経路に動揺がみられることを明らかにした。ほぼ同時に、列島内の各地での石製玉類の生産も同時多発的に活発化し、それぞれ独自の経路で流通しており、弥生時代後期後半～終末期は、多様な玉類が複合的なネットワークで流通する時期であることがわかった。これに対し、古墳時代前期前半に入ると、舶載玉類は流入窓口が近畿中部に収斂し、列島各地の玉生産も低調化することが明らかとなった。古墳時代前期後半には、山陰地域や北陸地域での玉生産が活発化するが、法量規格が連動して変化しており、近畿中部で最も出土量が多いことなどから、生産・流通に近畿中枢が関与していると考えられた。以上、第Ⅲ章では、弥生時代後期後半～終末期の複合的な玉類の流通ネットワークが、古墳時代の開始とともに近畿中枢を中心とする流通ネットワークに再編されることを示した。

第Ⅳ章では、課題(2)の解決のため、玉類の出土状況とセット構成を分析した。結果として、弥生時代後期～終末期には、玉類は基本的に装飾品のパーツとして流通し、各地で多様な種類が組み合わせられるのに対し、古墳時代前期には、近畿中枢で生産地の異なる玉類を組み合わせで構成されたセットが流通したと考えられる事例が出現することを明らかにした。

第Ⅴ章では、課題(3)の解決のため、各地における墳丘墓や古墳の築造動向と、副葬される玉類の内容を分析した。結果として、まず、弥生時代後期後半～終末期に、各地での墳丘墓の築造開始と連動して、埋葬のその他の諸属性にみられる階層性と、副葬される玉類のセット内容にみられる階層性が相関するようになることを明らかにした。以上は、有力者層のなかで玉類が身分的・地位的差異の表示のアイテムとして機能するようになったことを示唆する。ただし、玉類の種類の違いには地域差があり、西日本全域で共有されるような玉類の価値体系はこの段階で成立していないことが判明した。これに対し、古墳時代前期には、各地の有力者層が独自に玉類を調達する傾向が希薄となる。具体的には、より上位の層は、玉類のまとまったセットを近畿中枢から三角縁神

獣鏡等とともに入手して副葬し、相対的に劣位の層は玉類の入手機会に恵まれず弥生時代からの伝世品を副葬に供するようになることを明らかにした。以上から、古墳時代開始期における玉類の広域的な流通形態の変化は、各地の上位層が、近畿中枢との関係を結ぶことで地域社会において自らの優位を表示するようになるという変化と表裏の関係にあることが明らかとなった。

第Ⅵ章では、第Ⅲ章～第Ⅴ章の結果から玉類の流通・消費の通時的変化を復元したうえで、古墳時代の開始過程と、その前後の社会統合の実態を議論した。本論文での分析結果は、古墳時代の開始を、近畿中枢を中心とする広域的な中心一周辺関係の完成点ではなく、形成開始点とする理解を支持する。また、古墳時代の開始に至るまでには、弥生時代後期以降、各地で有力者層が析出されつつあったなか、弥生時代後期後半に舶載品の既存の流入経路が不安定となり、列島内での既存の地域間・集団間関係も動揺することで、各地の地域社会が、列島外や列島内の他地域との関係をめぐって競合する状態が生じたことが重要であると指摘した。そして、このような地域間の競合関係が、近畿中枢という中心をめぐる競合関係に再編成されるのが古墳時代の開始であり、各地における定型化した前方後円墳の築造と、そこでの葬送儀礼に密接に結び付く副葬品の授受の開始それ自体が、このような地域間関係の形成に大きな役割を果たしたと考えた。

本研究は、これまで古墳時代開始期前後の社会論では十分注意を払われてこなかった玉類を分析の対象としている。本研究が示した通り、玉類は、製作地と流通・消費の容態を明らかにすることが可能である。このことの利点を十分に生かして体系的な研究を遂行することにより、舶載玉類の流入状況と列島内の地域間関係の変化の連動から、この時期の列島内での社会変化が、東アジアの国際情勢と密接に関連することがより鮮明となった。また、玉類を保有する幅広い階層にアプローチでき、セット構成の分析から具体的な入手過程に迫ることができるという利点を十分に生かすことにより、古墳時代開始期における広域的な中心一周辺関係の急速な形成は、特定地域の政治勢力が主導するのではなく、むしろ、不安定な地域社会が、秩序維持のための参照点としての「中心」を必要としたという背景があることを、資料に即して示すことができた。